# 哺乳類の惑星

まんま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
哺乳類の惑星

【Ｎコード】
Ｎ６２６７Ｆ

【作者名】
まんま

【あらすじ】
のどかなネコ族の街に不穏な噂が流れる。

# 第1話　移住者

昆虫たちの統一性に欠けるオーケストラをＢＧＭに望遠鏡で夜空を眺めながら、チャトランは宇宙に思いを馳せる者なら大抵巡らすであろう月並みな想像をやはり思い描いていた。

――この広い宇宙には俺たちみたいなネコ族の暮らす星が他にもあるのかな。そして、同じように星を眺めて同じような事を考えているのかもしれない。

生涯出会うことのなさそうな異星人の存在を心の奥底で確信し、チャトランの黄褐色の体毛は心なしか逆立った。街明かりのない見晴らしのよい丘の上には満天の星がこぼれ落ちんばかりに煌めいている。地上に知的生物が現れる以前の太古の昔に発せられた光が今この頭上に降り注いでいるのだ。

不意に、傍らで鏡写しのように望遠鏡を覗き込んでいたミケルスの声がチャトランを時空の旅から呼び戻した。

「うちの近くにイヌ族の人が引っ越してきてさ、ちょっと怖いんだよね」

「へえ、どんな人？」

姿勢そのままに半ば聞き流しつつチャトランは素っ気なく尋ねた。ネコ族の国とはいってもタヌキ族やキツネ族なども暮らしており、イヌ族が住み着くくらい珍しい事ではない。逆に、他国へ移住するネコ族もいる。純血主義を貫く地域もあることはあるが、とにかくミケルスの話には望遠鏡から目を離すほどの話題性は無いように思われた。

「殺人鬼って噂されてる」

「え？」

テレビや映画の中でしか耳にしない、しかし異星人よりは身近に居そうな名詞が鼓膜に飛び込み、結局チャトランは望遠レンズから視線を外すことになった。いつの間にかこちらに向き直っていたミ

ケルスと顔を見合わせる。
「年齢は四、五十かな。何かこう、眼光が鋭くってさ、人を寄せ付けないオーラを発してんの。あれはタダ者じゃないね」
「タダ者じゃないのと殺人鬼との間にはだいぶ距離があると思うが」
「うん、だから本人に聞いてみた」
「は？」
「そしたら『その通りだ』って」
「からかわれてるんだろう」
「さあ、どうだろうね。今のところは大人しくしてるけど、いつその本性を現さないとも限らないから油断できないのさ」
まるでその時を待ち望んでいるかのようにミケルスは暗闇の中で緑色の瞳を怪しく輝かせた。誰の得にもならないのに怪談話に興じる心理と似ているかもしれない。
チャトランは恐怖ではなく脱力によって肩をすくめた。本当に殺人鬼なら逃亡中の身であり、正体を自ら明かしたりはしないだろう。百歩譲って明かしたとしても、それは相手を、つまりミケルスを生かして帰さない時のはずだ。
「そろそろお開きにしようか」
どこからどう見ても健在の友人を一瞥してから、チャトランはそう宣言して自分の望遠鏡をおもむろに片付け始めた。そうだね、とミケルスも特に異議を唱える理由もなく了解してチャトランに倣った。
聴衆の二人が会場を去った後も、不揃いな昆虫たちの管弦楽団は演奏を止めるわけにはいかなかった。常連客である木々や草花、夜空の星々が彼らの旋律に耳を傾けていたからである。

翌日、チャトランは昨夜の話をすっかり忘れ去っていた。登校時も授業中も昼休みも、下校時のその時まで一瞬たりとも思い出すことはなく、また思い出す必要性も無いはずだった。その引き出しの奥に永久保存された記憶を無造作に引っ張り出したのは、同級生の

女子シローナである。
「ねえ、殺人鬼の噂聞いた？」
シローナはミケルスの近所に住む女友達からその話を聞いたとの事だった。噂はすぐに広まると言うが、なるほど、ここまで広まっているということは一人前の噂だ。チャトランは本筋とは異なるところで妙な納得感を覚えていた。
「会いに行ってみない？」
お茶にでも誘うような軽いノリでシローナは言い放ったが、当然よし行こうと即答するわけにはいかないお誘いだった。
「殺人鬼の餌食になるために？」
「そんな噂、嘘に決まってるじゃない」
「だとしても善人って保証も無いし、危ない事には変わりないだろう。俺は行かない」
「じゃあ、私一人で行ってくる」
「お気を付けて」
「何かあったらチャトランのせいだからね」
「なんでだよ！」
「か弱い女の子を一人で殺人鬼のもとへ行かせるなんて、男としてあり得ないでしょ」
突っ込みどころ満載の陳腐な常套句だったが、突っ込むことすら陳腐に思えたのでチャトランは心の内だけでそれを消化した。
「それならミケルスを誘ったらいい。一度その殺人鬼さんと会ったらしいから話が早いんじゃないか」
「ふうん、ミケルスってああ見えて度胸あるのね。人は見かけによらないね、チャトランのほうが男らしいと思ってたのに」
「生まれ変わったら女になることにするよ」
「……もういいっ！」
突然大きな声を張り上げると、シローナは大股かつ足早にチャトランとの相対距離を広げ、そんなに怒るなよとなだめる間もなく視界から姿を消してしまった。

九割がた善意の発言をしたにもかかわらず機嫌を損ねてしまったことに合点がいかないチャトランだったが、是正するのも不満を募らせるのも無益な時間のような気がしたのでそれ以上考えないことにした。噂はやはり噂に過ぎないだろうし、ミケルスと一緒ならそれほど心配もないだろうとの楽観がそこには含まれていた。どうせ明日になれば、望まなくとも結果報告を聞かされる羽目になるのだから。

そう結論付けたのだったが……。

## 第2話　夕日の中で

「ただいま」
「おかえりなさい」
今日の夕飯が魚肉カレーであることは母親に確認するまでもなく嗅覚がすでに教えてくれている。反応した胃袋の小さな呻き声を腹部に感じつつ、チャトランは二階の自室へと続く階段を上った。
部屋に到着したチャトランはいつものように鞄を机の上に放り投げ、いつものようにベッドへ仰向けに倒れ込むと、いつものように背伸びをして快感の喘ぎを漏らした。昨夜の観測の疲れもあったので学校で惰眠を貪りたいのは山々だったが、チャトランは枕が変わると眠れないタイプであり、なおかつ枕そのものを必須とする面倒な体質なので、授業中に心地よく居眠りする同級生へ羨望のまなざしを向けるしかなかった。
ベッドの柔らかな抱擁に全身の力が吸い取られ、睡魔に手招きされるままどこまでもついて行こうと決めたその時、
「チャトラン！」
家の中限定で耳にすることができる母親の野太い声が一階から階段を駆け上がってきた。それが延べ何回目の呼びかけだったのかは判然としないが、大脳新皮質が認識した一回目ではチャトランは覚醒することができなかった。三回目でようやく上半身を起こしたチャトランは、うるせえなとは口にしなかったもののそれ以上の不快さで顔を歪めた。
階段の下からこちらを見上げている産みの親に対して、恩知らずな息子は全身に倦怠感を漂わせたまま部屋から姿を現し、愛想のかけらもない返事を階下へ吐き落とした。
「何だよ」
「ミケルス君が来てるわよ」
そんな態度をまるで意に介することなく母親は簡潔に用件を告げ

ると、スリッパの音をぱたぱたと床に響かせて自身の重要な職務へと戻って行った。後には行き場を失った鬱憤だけが取り残され、それをどこに軟着陸させるかしばらく模索していたチャトランだったが、とりあえず空中を旋回させたまま友人の訪問を優先しなければならなかった。

「やあ」

玄関を開けると、そこには安眠を妨害したことなど知る由もないミケルスの陽気な笑顔があった。待ちかねた様子のミケルスはさっそく手にしていた数枚の天体写真をチャトランに差し出した。

「昨日撮ったやつ」

「わざわざ持ってきたのか？明日、学校で渡してくれりゃいいのに」

「そのつもりだったんだけどさ、ちょっとここ見てよ」

ミケルスが指差した写真に顔を近付けたチャトランは、他の星の光より二回りほど大きい光体を視認した。言われてみれば違和感があるような気はするが、言われなければ自然であるような気もする。

「光の加減で星が大きめに写ったんじゃないのか？」

「じゃあ、こっちも見て」

想定していた質問だったらしく、ミケルスは手際よく二枚目と三枚目の写真を順番に指し示した。なるほど星の位置は同じだが、光体の位置だけが大幅に移動している。

「飛行機とか」

「数秒間でこれだけ移動する飛行機だと乗客は失神ものだろうね」

「なら戦闘機か」

「ああ、じれったい！ＵＦＯだよ！未確認飛行物体！宇宙人かもしれない！」

「うーん」

自分でももう少し高揚してもいいのではないかと思うくらいチャトランは冷淡に唸っただけだった。未確認飛行物体とは読んで字のごとく『宇宙船』とは限らない。何が飛んでいたって未確認ならそれはＵＦＯなのである。確かにこの光体が何であるかは気になる点

だが、この手の写真が衝撃的な事実を証明したことは今のところ一度もない。
「次の観測が楽しみだなあ」
趣味の天体観測があらぬ方角へ向かってしまう懸念を覚えつつも、無邪気に盛り上がっているミケルスを見てチャトランはまあいいかと思い直した。
――それにしても最近、妙な話が多い。ＵＦＯだの、殺人鬼だの……。
「ミケルス、シローナに会わなかったか？」
そうである。シローナはミケルスと共に噂の殺人鬼のもとへ向かったのではなかったか。しかし今、そのミケルスは目の前でＵＦＯに心を奪われている。
「シローナ？うん、例の殺人鬼の家へ行くって言うから場所を教えたけど」
「一人で行かせたのか？」
「僕はこの写真の用があったから」

旺盛な食欲と快適な睡眠を提供する気候が街には訪れていたが、後ろにミケルスを乗せて自転車のペダルを漕ぐチャトランは汗だくだった。
「そんなに心配なら最初から一緒に行けば良かったのに」
「別に。気が変わっただけだ」
「大丈夫だと思うよ。僕だって平気だったわけだし」
「いつその本性を現すかとか何とか言ってたくせに」
殺人鬼と噂されるイヌ族の男の家は、ミケルスの家の近所とはいってもやや奥まった場所にあった。周囲を囲む垣根が排他的な威圧感を醸し出しており、夕日に照らされた木造の家屋はひっそりと静まり返っている。
自転車を降りた二人は垣根の入り口から敷地内の様子をうかがった。誰かいませんか、とチャトランは呼吸を整えながら声をかけて

みたが人の気配はしない。少し躊躇してから二人は意を決して敷地内に足を踏み入れた。玄関の前でも声をかけてみたり戸を叩いてみたりしたが、やはり応答はない。

「前はそこの庭にいたんだけどね」

ミケルスが庭に視線を移したその時、裏庭の方から微かな物音が聴こえた。そんな小さな音が聴こえる状況なのだから、誰かが居るのであればこちらの声が聴こえないはずはない。身を固くして顔を見合わせた二人は、互いに先を譲りながら家屋の脇を通って恐る恐る裏庭を覗き込んだ。

そこにイヌ族の男の姿は無かったが、二人が見た光景は安堵を誘引するものではなく噂が事実だったのではないかという一層の恐怖であった。裏庭は思っていたより広く、簡素な木製のテーブルと椅子が置かれ、花壇には殺人鬼の家に似つかわしくない色鮮やかなコスモスが咲き誇っている。そして、その花壇の傍らの地面には殺人鬼の家に似つかわしいものが横たわっていた。艶やかな白い体毛の一部をべっとりと赤く染めた少女である。

「シローナ！」

すぐさま駆け寄ろうとした二人はしかし、背後から凄みのある声で呼び止められて立ち止まった。背骨が氷になってしまったかのような悪寒を覚えながら、二人は見たくないものを見るために振り返った。

果たしてそこにはイヌ族の男が眼光鋭く屹立していた。筋骨隆々とまではいかないものの引き締まった肉付きのよい体格をしており、街角でぶつかっても喧嘩を売ってはいけない相手である。しかし、喧嘩を売ってはいけない理由は別のところにあった。男の右手には出刃包丁が握られ、その包丁の刃からは赤い液体が滴り落ちていたのである。

「……見たな」

見ていませんとは言えない雰囲気だった。

# 第3話　戦う男

今晩の魚肉カレーにあり付けなくなりそうな今、最後の晩餐は昨日の夕飯ということになるのだが、さてその献立は何だっただろうかとチャトランは思い出そうとしていた。この窮地にずいぶん余裕をかましているなと思うのは平常心の理屈であって、テスト勉強をやらねばならない時に急に部屋の掃除をしたくなるのが人の心理というものである。

「こ、殺さないで！」

その意味ではミケルスはチャトランより平常心に近いところに居たのかもしれない。恐怖を真正面から受け止めたミケルスは、脚力を失って臀部を地面に落下させた。

チャトランは友人の絶叫で我に返り、遅ればせながら次の行動について考え始めた。選択肢は戦うか逃げるかのどちらかである。戦うのなら一対一では勝ち目はない。二人で立ち向かえば何とかなるかもしれないが、腰の砕けた友人にそれを期待するのは酷というものだろう。となると、やはりとっとと逃げるしかないのだが、腰の砕けた友人を置き去りにするのもまた酷というものである。友人と絶望的な運命を共にするか、どうせ助けられないなら一人で逃げるか、美徳と背徳の狭間で揺れながらチャトランは眼前の殺人鬼を見据えた。

石像のように姿勢を崩さなかったイヌ族の男は、そのまま石像でいてくれとの願いも虚しく一歩を踏み出した。

「どうしよう、チャトラン」

「ミケルスはどうするんだ」

「僕の事はいいから早く逃げて」

「いいのか？」

「や、やっぱり僕を見捨てるつもりだったんだね」

「……」

頭の中では依然として優柔不断な論争が繰り広げられていたが、次の瞬間、チャトランは結論に達しないまま行動へと移った。イヌ族の男に向かって敢然と飛びかかったのである。虚を突かれたかに見えたイヌ族の男はしかし、巧みに身体を翻して襲撃を寸前でかわすと、手刀をチャトランの首筋に素早く打ち込んだ。

不格好に地面へ倒れ込んだチャトランは首に伝わる鈍い痛みと共に呻きを漏らし、そして覚悟を決めた。せめて気を失っていれば恐怖も苦痛も感じることなくあの世へ旅立てたのに、と。

――魚の煮付けだ。

チャトランはあまり好きではなかったが、父親の好物であるため週に一度は食べる羽目になる、それが最後の晩餐だった。世界最後の日に何を食べたいかというお決まりの問いがあるが、食べたい物は常日頃から食べておくのが最善だろう。最期の時はある日突然やって来るのであって、揚げたての白身魚のフライにタルタルソースをかけて食っておけば良かったと後悔するのが現実である。

頭の中で過去の思い出がぐるぐると回り始めていた。ああこれが走馬灯のようにってやつかと感慨に浸ったものの、チャトランは走馬灯を見たことがないのでたぶんこういう物なんだろうと強引に納得した。さらに両親や友人たちの顔が浮かんでは消えてゆき、聴き覚えのある甲高い笑い声が聴こえてくる。

――笑い声？

「大丈夫かね？軽くやったつもりだが」

チャトランの背中に突き立てられたのは出刃包丁ではなく、殺人鬼の最後の情けにしては温和すぎる台詞だった。チャトランが頭をもたげて身をよじると、イヌ族の男が先程よりやや緩んだ表情で手を差し伸べている。そして、花壇の傍らではシローナが腹を抱えてけたけたと笑い転げていたのだった。

「どうした、ポメラ。何を泣いている」

リビングの水槽の前ですすり泣くポメラに、シバはいささか苛立

った様子で尋ねた。水槽の中を見やると、派手な色彩の魚が引っ繰り返って浮かんでいる。
「熱帯魚が死んでしまったの。餌はちゃんとあげていたのだけれど……」
「魚が死んだくらいで何だ、そんなものはまた買えばいい。前線では多くの兵士たちが死んでいるというのに……お前は士官の妻だぞ、しっかりしてくれなければ困る」
「……はい」
ポメラはハンカチを取り出して涙を拭い、シバの方に向き直って顔を上げた。赤く腫らした目が痛々しい。そこへ、慌ただしい足音を廊下に響かせて執事がやって来た。
「旦那様、至急のお電話でございます。司令部のベルマン大将から」
執事が伝えた上司の名前を耳にすると、シバは険しい表情に切り替わって書斎へと向かった。大事な電話は書斎に繋ぐことになっている。しばらくして戻ってきたシバの表情は一層険しかった。
「休暇は終わりだ。今から国境線に戻らなければならない」
「今度はいつお帰りになるの？」
「永久に帰って来ないかもしれないな」
「……」
「なあに、私が死んでもお前が不自由をすることはないから安心しろ」
「私はあなたが無事なら……」
「生きて帰っても五体満足とは限らん。そのほうがお前にとっては面倒だろう。いいか、ポメラ。お前はもっと打算的にならなくてはいけない。安っぽい感情に左右されていては馬鹿を見ることになるぞ」
「私は……」
「さあ、急いで支度をしなければ」
妻の言葉を遮ったシバは颯爽とリビングを後にした。すでにシバの頭の中は戦いへの高揚感と戦術の構築で満たされていた。それが

ポメラとの最後の会話になることを知る由もなく。いや、たとえ知っていたとしてもその時のシバはやはり同様の会話を交わしたに違いなかったが。

シバは生粋の軍人だった。国家と国民を守るために命を懸ける。陶酔と尊大さによってそれを標榜する者たちは少なくないが、彼は決断力と公正さによって有言実行してきた数少ない人物の一人である。オオカミ族の進軍を的確な采配で幾度となく撃退し、非戦闘員に対しては常に寛容であり、部下の綱紀の乱れを決して見逃さなかった。戦場に大義ある限り、彼は極めて模範的な指揮官と言えるはずだった。

戦場に大義ある限りは……。

## 第4話　星の丘で

「チャトランも食べる？」
　ミケルスはたった今購入したばかりの丸い桜色の海老せんべいを差し出した。受け取ったチャトランは裏表を数回ひっくり返して何かを確認している。
「これは普通の海老せんだよな？」
「うん」
「でも、『空飛ぶ円盤せんべい』なんだろ、これって」
「便乗商売ってやつだね」
　小気味のいい破砕音を立てながら、ミケルスとチャトランは空を飛ばない円盤を胃袋の中に収めていった。
　ここ数週間、ネコ族の街は未確認飛行物体の話題で持ち切りとなっていた。ミケルスが先日の写真を片手に街中を吹聴して回ったくらいでは、ここまでの騒ぎにはならなかっただろう。発端は肉眼の目撃者が相当数存在したからで、少なくとも街の上空を何かしら余計なものが飛び回っていることを裏付けたのだった。以来、お気に入りの『星の丘』でもにわか観測者が急増し、チャトランたちの趣味の遂行はしばらくお預けになっている。一方、迷惑な飛来物と入れ替わるように殺人鬼の噂は不人気を被ることになり、人々の関心を失ったものが淘汰されてゆく運命なのは噂も同じだった。
　イヌ族の男はザッシュと名乗った。冗談の域を逸脱したドッキリ芝居以降も、シローナは足しげく彼の家を出入りしているらしい。
「シローナはザッシュさんに気があるのかもな。結構お似合いのような気もするから不思議だ」
「本気で言ってる？」
「そりゃあ、種族も違うし、親子ほどの年の差は大きすぎるが」
「いや、そうじゃなくて」
　珍獣に遭遇したような表情のミケルスに、チャトランは疑問符を

投げ返すしかなかった。
「どういうことだ？」
「シローナが気があるとしたら、それはチャトランだってこと」
「え？」
「チャトランは毛並みもいいし、格好いいし、ザッシュさんに立ち向かっていった時なんて鳥肌ものだったよ。僕は腰を抜かしてわめいてただけ。シローナがどっちに惚れるかは明らかだね」
ミケルスの憂鬱な溜め息を聴き、チャトランはもう一つの事実を認識したが、口には出さなかった。
その時、遠くからチャトランとミケルスの名前を呼ぶ声が届いた。体格の良いイヌ族の男と、両手を大きく振る白毛の少女の姿が見える。噂をすれば、というわけではなく、待ち合わせていたので二人がやって来たのは必然だった。
四人がこうして一堂に会するのは、あのドッキリ芝居以来である。チャトランは妙な懐かしさと緊張感を覚えたが、シローナはすでに別の高揚感を抑え切れないようだった。
「こうして集まるとお祭りの時みたいでワクワクするわね。あ、それ『空飛ぶ円盤せんべい』でしょ？一度食べてみたかったの、私にも頂戴」
ミケルスが承諾するのとほぼ同時に、シローナはせんべいを一枚つまみ取り、おしとやかとは程遠い食べ方で味見を始めた。
「うん、円盤の味がする」
「どんな味だよ」
「あははは」
自身のボケに対してかチャトランのツッコミに対してか、白い歯を覗かせたシローナは軽快に笑い飛ばしたのだった。

星の丘はその夜も大盛況だった。望遠鏡や双眼鏡で真剣にＵＦＯを探す者、テントを張ってキャンプ気分の者、二人の世界に浸るカップル、夜遊びの口実としてやって来ている者など様々である。チ

ャトランたちはというと、最初と最後の目的が混合していると言えるだろう。今夜の「集会」を提案したのは意外にもザッシュだった。それをシローナが面白がり、元々ＵＦＯに関心のあるミケルスが賛同し、チャトランもザッシュの提案となると断るのは気が引けた。
「ザッシュさんも星とかＵＦＯに興味があるんですか？」
「昔はあまり無かったな」
　チャトランとザッシュは草むらに寝そべって星空を眺めている。ミケルスは持参した望遠鏡を覗き込み、シローナはそれに付き合っている。というより、チャトランがそう仕向けたのだったが。
「例えば、一万光年先の星には光の速度で一万年かかるという。つまり、行くことができない場所について考えることに何の意味があるのか、とね。そう思っていた」
「今は？」
「ワープ航法なら可能だ」
「え！？」
「ははは、そういう冗談も悪くないと思うようにはなったかな」
　想像していたよりも穏やかなザッシュの雰囲気に、チャトランの緊張も次第にほぐされていった。
「……だから、あんな趣味の悪いドッキリを仕掛けたんですね」
「あれは悪い事をした。だが、趣味が悪いのは脚本家の責任さ」
　ザッシュは上半身を起こすと、親指で若き脚本家を指し示した。その脚本家はミケルスと案外楽しそうにやっている。
「脚本を選ぶのも俳優の技量ですよ」
「それは一流の俳優の話だろう。私はただの大根役者だ」
「いや、あれは演技とは思えないほど……」
　二人の掛け合いが続いていたその時、
「あのお……」
「うわっ！」
　暗がりの中、背後から不意に声をかけられたため、チャトランは反射的に身体を反転させて身構えた。そして、そのまま相手を見据

えた。いや、魅了されたのかもしれない。
月明かりに照らされたその白毛の人物は、シローナとは比べものにならない妖艶さを漂わせたネコ族の女性だった。
「一人で心細かったんです。ご一緒させていただけませんか？」
断ることが不可能な愛らしい瞳と共に、彼女は魅惑的な微笑みを浮かべたのだった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6267f/

---

哺乳類の惑星

2010年12月19日01時36分発行